

2013年度の里子 41 名を決定

特定非営利活動法人ミランクラブジャパン
理事長 マナダール マダーブ ナラエン

先月 6 月号で 2013 年度の里子 41 名決定をご報告しました。今年は去年の倍もの多くの女子に支援できることになった理由について簡単に説明致します。

ご存じの通りミランクラブの支援額は 4 月からは月 500 牒[°]-となりましたが、3 月までは月 400 牒[°]-でした。昨今の物価高騰に合わせ少しずつ出来る範囲で増やしてはいますが、就学に関わる全ての費用を賄うのは苦しい状態です。ミランクラブは里子 1 人に対して何から何まで十分な支援を行うというより、より多くの困っている孤児、母子家庭の女子が学校へ行けるよう限られた中から支援を行っています。不足分はそれぞれが置かれている家庭や周りの大人の理解、その子の学ぶことへの意欲、向上心が埋めています。経済的に苦しくても何とかして勉強を続けようという意欲がなければ、支援金だけでは続かないのです。

今年の 2 月号にネパールから届いた報告「奨学基金、ミラン職業研修センター及び MCN の 2013 年予算見積もりについて」に記載された a) ~ l) の奨学金規則を再度、参考にして頂ければ分かりやすいと思います。

ネパールの学校教育では各学年の終わりに進級試験があります。これに受からなければ先には進めません。その最たるものが SLC (全国統一高等学校試験) になる訳ですが、子供たちは常に意欲を試されています。そして前にもお話したことです。生まれた環境により子供たちは各民族の言葉で育ちます。学校入学により外国語のようなネパール語で勉強することになるのです。もちろんネパー

ル語で育った子供や、大きな町で育った場合は有利にはなりません。不利な立場の子供たちは、たくさんの勉強時間が必要です。

奨学金を受ける立場の子供たちの環境は貧しく、大人の仕事を手伝わなければ生活できないため、勉強は後回しになります。それでも頑張っただけで通学し、試験に受かりと出来ているうちはいいのですが、各課程の試験に 2 回合格できなかつたり、奨学金受取や報告の規則を守れなかつたり、学校の時間を守れなかつたり等々すると、受け取れる権利はなくなってしまうのです。言うのは簡単ですが、貧しさに負けてしまうのです。

学校を諦めてしまった子、試験に受からない子、行方不明(連絡がない)の子、親の都合による子、その他にもいくつかの理由はありますが、支援の枠に余裕ができ、今年度の里子が増やせた結果になりました。

本当は全員どうにか救いたい気持ちですが、ミランクラブに支援の順番を待つ女子は数多く、やはり規則なしの運営では活動を広げるのに無理があるのです。

もうひとつ、日本の高校までの教育に当たるネパールの 10+2 (短大) は SLC 合格後に進学しますが、前はミランクラブからの奨学金がありました。しかし現在は特別里親の方に支援して頂いています。そこからの余裕も出てきたということです。

ミランクラブは教育に触れる機会が少ない地方の子供たちに、国の隅々まで教育が行き渡るようにと支援をする努力を進めています。